

多民族社会のリアルを映す多様な表現

マレー系、中華系、インド系住民などで構成される多民族多言語国家、マレーシア。外資系企業の誘致や、IT、重工業の充実といった経済政策を通じ、積極的なグローバル化を図ってきた同国のリアルな日常、その葛藤とは――。

同時代の演劇、パフォーマンスを紹介する「公演編」とディスカッションやゲームを通じてマレーシアの社会、文化を伝える「レクチャー編」からなるプログラムには、さまざまな民族的バックグラウンドを持つアーティストが参加。建国間もない1960年代生まれのジョー・ク

カサス、ウォン・オイミンと、高度成長へと向かう70年代後半から80年代生まれのリー・レンシン、ムン・カオ、スリ・リウら、異なる世代のつくり手の眼差しも、マレーシアの現在をより多層的に描き出す。今回のF/Tのコンセプトは「境界を越えて、新しい人へ」。

異なる言語、宗教、生活習慣を持つ民族で構成されたマレーシア社会において、アーティストが抱く課題意識、表現手法に、今まさにグローバル化が生み出す諸問題に向き合いつつ、多様性のあり方を探る日本の観客は、何を感じるだろう。

アジアシリーズとは？

アジア地域から毎年1カ国を選定し、その国の舞台芸術を中心とするアートの特集を組むシリーズ。綿密なりサーチを知り得た歴史、文化、社会背景を踏まえつつ、現地で活動するアーティストを紹介し、継続性のある交流を行う。F/Tではこれまでに韓国（F/T14）、ミャンマー（F/T15）を特集。いずれにおいても、各国のアートシーンを俯瞰しつつ、それぞれの社会のあり方を反映する気鋭のアーティストの作品をキュレーションしてきた。

F/T16のマレーシア特集は、F/T15のミャンマー特集に引き続き、国際交流基金アジアセンターとの共催で行う。

国際交流基金アジアセンター

独立行政法人国際交流基金（ジャパンファウンデーション）は、全世界を対象に総合的に国際文化交流事業を実施する日本で唯一の専門機関です。アジアセンターは2014年4月に設置され、ASEAN諸国を中心としたアジアの人々との双方向の交流事業を実施・支援しています。日本語教育、芸術・文化、スポーツ、市民交流、知的交流等さまざまな分野での交流や協働を通して、アジアにともに生きる隣人としての共感や共生の意識を育むことを目指しています。



「ASIA HUNDREDS（アジア・ハンドレッズ）」は、国際交流基金アジアセンターの文化事業に参画するアーティストなどのプロフェッショナルを、インタビューや講演会を通して紹介するシリーズです。文化・芸術のキーパーソンたちのことばを日英両言語で発信し、アジアの「いま」をアーカイブすることで、アジア域内における文化交流の更なる活性化を目指しています。

『NADIRAH』作家のアルフィアン・サアット氏と本冊子の寄稿者の滝口健氏のインタビュー記事も掲載されています。

http://jfac.jp/culture/dictionary/asia100/

フェスティバルトーキー実行委員会		
顧問	公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 会長、能楽師 福原義春 株式会社資生堂 名誉会長	
名誉実行委員長	高野之夫 豊島区長	
実行委員長	公益財団法人新国立劇場運営財団 顧問、アサヒビール株式会社 社友 福地茂雄	
副実行委員長	NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 会長 市村作知雄 豊島区文化工部長 小澤弘一	
委員	東清 昭 公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長	
	尾崎元雄 公益社団法人企業メサ協議会 理事長、花王株式会社 顧問	
	熊倉純子 東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 教授	
	斉藤幸博 株式会社資生堂企業文化部長	
	鈴木敦子 アサヒビール株式会社経営企画本部社会環境部 部長	
	鈴木正美 東京商工会議所豊島支部 会長	
	永井多恵子 公益財団法人せたがや文化財団 理事長	
	樋口友久 豊島区文化工部文化デザイン課長	
	岸正人 公益社団法人としま未来文化財団 部長	
	滝池尚緒子 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事長	
荻原円花 フェスティバルトーキー 事務局長		
河合千佳 フェスティバルトーキー 副ディレクター		
澤々木美津子 豊島区総務部総務課長		
法務アドバイザー	堀井健策、北澤尚登（骨董通り法律事務所）	

フェスティバルトーキー実行委員会事務局		
ディレクター	市村作知雄	
副ディレクター	河合千佳	
事務局長	荻原円花	
制作	喜友名織江、十万華紀子、寛川真由子、砂川史織、松嶋理奈、松宮俊文、横井貴子、岡崎由実子、三平文乃、藤井友理、細川浩伸、米原晶子	
営業	長原理江	
広報	小島明紀子、武田侑子	
経理	堀久美子	
総務	平田幸美	
票券	武井和英	
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子	

技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	河野千穂
顧問・コーディネーター	佐々木美津子（株式会社ファクター）
音響コーディネーター	相川 晶（有限会社サウンドワイズ）
アートディレクション	氏家啓雄（有限会社氏家ブランニングオフィス）
イラスト	naomi@paris.tokyo
ウェブサイト	竹下雅哉（有限会社氏家ブランニングオフィス）
海外広報・翻訳	ウィリアム・アンドリュース
物販	渡辺 淳
コピーライティング	鈴木理映子
プログラム・コーディネーター	梅堀広彦
中国プログラム・コーディネーター	小山ひとみ

主催	フェスティバルトーキー実行委員会 豊島区 / 公益財団法人としま未来文化財団 / NPO法人アートネットワーク・ジャパン、 アークカンパニル東京・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
----	--

アジアシリーズ共催	国際交流基金アジアセンター アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
後援	外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、J-WAVE 81.3 FM
特別協力	西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チャコト株式会社

協力	東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋西口公園連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まつり、池袋西口公園活用協議会、南池袋公園をよくなる会、ホテルメトロポリタン、ホテルブランドシティ、池袋ホテルズ
宣伝協力	株式会社ポスターハリス・カンパニー、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

平成28年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業（池袋/としま/東京アーツプロジェクト事業、としま国際アートフェスティバル事業）

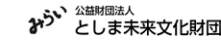
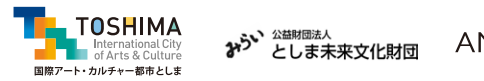
公益社団法人企業メサ協議会 2021芸術・文化による社会創造ファンド採択事業

フェスティバルトーキー16は東京芸術祭2016の一環として開催されます。

インターン 雨宮彩乃、猪狩文花、石川美季、白竹遥希、岡村貴秀、小川瀬貴、甲斐ひろな、藤原麻緒、栗川知樹、窪田博美、坂田佳実衣、嶋山美文、篠原 程 美形、戸田道香、中山 徹、西島彰英、堀井 花、松下怜来、松村珠英、美和咲紀、森 洋介、山崎衣理、山田あい子、山本萌子、横山愛里、吉原啓介

スペシャルサンクス：F/Tサポーターのみなさま

会期：平成28年（2016年）10月15日（土） - 12月11日（日）



Festival/Tokyo Executive Committee
Advisors: 野村 洋行 Man Nomura (Chair, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations, Noh actor) Yoshiharu Fukuhara (Honorary Chair, Shiseido Co., Ltd.)

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano (Mayor of Toshima City)

Chair of the Executive Committee: Shigeo Fukuchi (Advisor, New National Theatre Foundation, Senior Alumnus, Asahi Breweries, Ltd.)

Vice Chair of the Executive Committee: Sachio Ichimura (Director, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)) Kouichi Ozawa (Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City) Akira Touzawa (Director of Secretariat of Toshima Mirai Cultural Foundation)

Committee Members: Motoki Ozaki (President, Association for Corporate Support of the Arts, Corporate Advisor, Kao Corporation) Sumiko Kumakura (Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts) Yukihiko Saito (General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.) Atsuko Suzuki (General Manager, Social & Environmental Department, Asahi Breweries, Ltd.) Masami Suzuki (Chair, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima) Teiko Nagai (Chair, Setagaya Arts Foundation) Tomohisa Higuchi (Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City, Director of Cultural Design Section) Masato Kishi (Executive Manager of Toshima Mirai Cultural Foundation) Naoko Hasulke (Representative, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)) Madoka Ashihara (Administrative Director, Festival/Tokyo) Chika Kawai (Vice Director, Festival/Tokyo)

Supervisor: Mitsuko Sasaki (General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City) Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotko Dori Law Office)

Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat
Director: Sachio Ichimura
Vice Director: Chika Kawai
Administrative Director: Madoka Ashihara
Production Coordinators: Orii Kijuna, Akiko Juman, Majoiko Arakawa, Shiori Sunagawa, Luna Matsushima, Toshifumi Matsumiya, Takako Yokoi, Yumiko Okazaki, Ayano Misao, Yurii Fujii, Hiromitsu Hosokawa, Akiko Yonehara
Sales & Planning: Rie Nagahara
Public Relations: Akiko Ogura, Yuko Takeda
Accounting: Kumiko Tsutsumi
Administrator: Saki Hirata
Ticket Administration: Kazumi Takel
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Chizuru Kouno
Lighting Coordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Coordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction: Yoshio Ujiiie (Ujiiie planning office)
Illustrations: naomi@paris.tokyo
Website: Masaya Takeshita (Ujiiie planning office)
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Copywriting & Editing: Rikuo Suzuki
Program Coordinator: Masahiko Yokobori
Chinese Program Coordinator: Hitomi Oyama

Organizers: Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ), Arts Council Tokyo & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture) Asia Series co-organized by the Japan Foundation Asia Center Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd. Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEDANKYO, J-WAVE 81.3 FM Special co-operation from SEIBU IKBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd. In co-operation with Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Ikebukuro West Gate Park Management, Neighborhood of the Minami Ikebukuro Park, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association PR Support: Poster Hari's Company, Waseda University Tsubouchi Memorial Theatre Museum

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2016

Supported by Association for Corporate Support of the Arts, Japan (2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture)

Festival/Tokyo 2016 is organized as part of Tokyo Metropolitan Festival 2016.

Period: October 15 (Sat) to December 11 (Sun), 2016

アジアシリーズ vol.3

マレーシア特集

Asia Series Vol.3

Malaysia

2016.

10.22 Sat - 11.13 Sun

にしすがも創造舎、森下スタジオ、東京芸術劇場アトリエイースト

Nishi-Sugamo Arts Factory, Morishita Studio, Tokyo Metropolitan Theatre (Atelier East)

FT Festival//Tokyo

まだ存在しない「マレーシアの舞台芸術」を求めて 滝口健(シンガポール国立大学リサーチフェロー)

1999年、当時所属していた国際交流基金の駐在員として、クアラルンプールに赴任した当初に面食らったことがありました。それは、この国の人たちを知ろうとした時に「マレーシア人」というくりかたがほとんど有効ではないということです。「君たち日本人はこういうときにはどう考えるんだ」と聞いてくる友人たちに、「君たちマレーシア人はどうなんだ」と聞きかしても、彼らの表情に浮かぶのは曖昧な笑顔。「僕はチャイニーズだから」、「マレー人としてこう考える」、「インディアン文化はこうだ」という回答に、ひどく困惑したことを覚えています。自分がそれまで自明としてきた「国」とはかなり違う「国」。それがマレーシアの第一印象でした。

その印象の理由を考えるには、歴史をひもどく必要があります。現在のマレーシアの地にはじめて生まれた政治的なまとまりは、15世紀に成立したマレー系のイスラム教港市国家、マラッカ王国でした。その後続いたポルトガルとオランダによる植民地支配によってマラッカ王国は崩壊しましたが、スルタンを頂点としたマレー人社会の構造は現在のマレーシアまで生き残ることになります。一方、中国からの移民がマラッカに定住をはじめたのは、オランダが移民を積極的に招き入れた17世紀だとされています。彼らは出身地ごとに「幫」と呼ばれる独自のネットワークを組織し、植民地の経済活動に大きな影響力を持つようになりました。植民地の支配権がイギリスに渡ると、サトウキビやゴムのプランテーションの労働力として特に南インドからのインド人移民が流入するようになります。20世紀半ばの英領マラヤでは、イギリスの支配下でこのように文化も歴史的な背景も全く違う人々が、ほとんど相互の交流もないままに共存していたのです。

1942年から3年半続いた日本による占領を経て、1957年にマラヤ連邦がイギリスからの独立を達成するまでの過程は、そのようにばらばらであった人々を「国民」としてまとめるための方法論を探る過程であったといってもいいでしょう。そこで選択されたのは、各民族が自らを代表する政党を作り、その連携によって統治するという方法でした。今回、レクチャー編で紹介されている『POLITIKO』が端的に描いているように、各政党は民族

の代表であり、特定の利害を代表しているのです。

独立からしばらくは、各民族の指導者層による活発な交渉がおこなわれました。多数派を占めるマレー人は憲法で先住民としての「特別な地位」を認められるという「名」を得る一方で、自由放任主義的な経済政策が採用され、経済を支配する華人商人に有利な状況を作るという「実」が華人には与えられたのです。しかし、こうした動きは「国民」としての意識の形成には必ずしもつながりませんでした。むしろ、経済格差が拡大した結果、各民族間の対立が深まることになったのです。それが爆発したのが、1969年に発生し200人近い死者を出したマレーシアで最悪の人種暴動でした。レクチャー編の『BONDINGS』でも印象的に語られているこの暴動は、多民族国家としてのマレーシアにトラウマに近い傷を残すことになりました。政府は暴動の原因はマレー人の経済的な弱さにあるとして、徹底的なマレー人優遇政策、いわゆるブミプトラ政策を導入しました。現在も続いているマレー人への優遇措置は経済面だけでなく、生活のあらゆる分野におよんでいます。この流れの中で、1973年に「国民文化政策」が導入されることになります。これは「(1) マレーシアの国民文化はこの地域の土着文化を元にすべきである、(2) 他の文化が持つ適切かつ特徴ある要素については、これを取り上げて国民文化の重要な要素である」と規定し、「第2項における『適切かつ特徴ある』という判断は第1項および第3項の文脈でのみおこなわれ、他の価値判断は考慮しない」と注記されています。つまり、マレー人の文化こそがマレーシアの「国民文化」の根幹であると定められたのです。この政策は、未だにマレーシアの文化政策の基本的な方針として堅持されています。

マレーシアの民族問題を考える時、重要な意味を持つのがシンガポールとの関係です。シンガポールは1963年にマラヤ連邦と合併し、マレーシアが成立しました。シンガポールの初代首相、リー・クアンユーは、東京23区とほぼ等しい大きさしかないちっぽけな島が生き残るためにはマレーシアと合併するしかない信じていたのです。しかし、リーが掲げた「マレーシア人のマレーシア」、

つまり民族を超えて「マレーシア人」という国民を作りだそうというスローガンは、合併直後から摩擦を生み始めました。各民族の平等な立場を主張するリーの思想は、マレー人に「特別な地位」を認める立場とは相容れなかったのです。結局、わずか2年でシンガポールはマレーシアから「追放」される形で独立することとなりました。

独立後、シンガポールは国の生き残りをかけて、独自の多文化社会のモデルを築き上げていきます。「第三世界から第一世界へ」をキーワードに、経済発展と効率を最優先する方法論が導入されたのです。独立直後に英語を事実上の第一言語と定めたのはその端的な例と言えるでしょう。どの主要民族の母語でもない、いわば「中立」の言語である英語を第一言語とすることで民族間の対立を防止するとともに、ユニバーサルな言語である英語を解する労働者を育てることで、海外からの直接投資を呼び込むことを狙ったのです。アイデンティティの重要なよりどころである言語さえ政府が管理するこの姿勢は、時に強権的との批判も生むことになりました。一方で、そのような政策の結果、シンガポールが現在の繁栄を築いたのも事実なのです。

元々は一つの国であり、「よいー、どん」で異なる多文化社会の実験を開始したマレーシアとシンガポール。お互いの国は、自分の国がもしかしたらそうになっていたかもしれないという似姿でもあります。自分たちが実現できなかったものや失ったもの（マレーシア人にとっては、例えば高度に発展した経済やクリーンな政治体制であり、シンガポール人にとってはコミュニティにおける親密な人間関係や帰属意識）を相手の国に見出すこともあるはずです。一方で、ある種の「近親憎悪」に近い感情が抜きがたく存在することもまた事実なのではないでしょうか。

それぞれの国の民族問題についても、当然、複雑な感情が生まれます。特にマレー人は、マレーシアではさ



インスタントカフェ・シアターカンパニー 『NADIRAH』 Photo: Sessa Kalimuthu



『B.E.D Episode 2』 Photo: Fahad Iman

まざまな特権に守られた多数派であるのに対し、シンガポールでは少数派です。そのためでしょうか、マレー系シンガポール人には「特権に守られなくても、実力で自分たちを認めさせるのだ」という意識が強く見られるように感じます。今回上演される『NADIRAH』の主人公、ナディラは敬虔なムスリムであり、イスラムの教えに真面目すぎるほどに向き合おうとします。まるでマレー人としてのアイデンティティを社会に向けて声高に叫ぶかのようです。一方、主人公の親友であるマレーシアからの留学生、マズナーは奔放な態度を崩しません。マレーシアの大学に入るならマレー人向けの優先枠を使うことができるのに、そうした特権に頼ることなくシンガポールの大学で学ぶ自分は、これ以上社会に対して証明することなどないのだといわんばかりに。マレー系シンガポール人であるアルフィアン・サアットは、この作品で、両国にまたがるこうした複雑な感情を描き出しています。

このような民族の意識はどこへ行き着くのでしょうか。『B.E.D. (Episode 5)』の構成・演出・振付を手がけるリー・レンシンもまたシンガポールで学んだ経験を持つマレーシア人です。その後、ニューヨークに移って西洋的なダンスの方法論を学ぶ中で、彼女は自分の創造性の根源にあるのがマレーシアの土着の文化であることを再発見していったと語っています。中華系マレーシア人である彼女は、マレー文化が優遇される環境の中で創作活動をおこなっています。しかし、グローバルな規模での交流が進み、多様な影響を受けつつ作品を作っている彼女にとっては、マレーシアの「土着文化」とはもはやマレー人对華人という枠組みを超えたものになってきているのかもしれませんが。リーの目には民族を超えた「マレーシア」のアイデンティティが見えているのでしょうか。

今回のマレーシア特集に含まれる作品は、すべてが独自の方法でマレーシア社会の断面を鋭く描き出してい

ます。一方で、これらを並べてみると、煩雑でとりとめがないように見えるかもしれません。「マレーシア人」なるものがまだ存在しないのと同様に、「マレーシアの舞台芸術」と呼ぶべきものもまた存在していないと

正式国名:マレーシア (Malaysia) 首都:クアラルンプール (Kuala Lumpur) 面積:33万平方キロメートル (日本の約0.9倍) 人口:2,995万人 (2013年／日本の約5分の1) 政治体制:立憲君主制 公用語:マレー語、英語もよく通用する その他、中国語、タミル語など 民族構成:マレー系67%、中国系25%、インド系7%、その他1% 宗教:国教はイスラム教。その他、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教など 通貨:マレーシア・リンギット (RM) 年間の日中平均気温:27 ~ 33℃	
---	--



外務省ウェブサイト マレーシア基礎データより

アジアシリーズ vol.3 マレーシア特集 演劇×ダンス×レクチャー×ゲーム×トーク

【F/Tトーク】

『多民族国家マレーシアにおけるアートプロジェクト』
登壇者:ファイルズ・スレイマン、ロスリシャム・イスマイル (イセ)
10.22 Sat
東京芸術劇場 アトリエイースト

【公演編】

インスタントカフェ・シアターカンパニー
『NADIRAH』
作:アルフィアン・サアット
演出:ジョー・クカサス
11.11 fri - 11.13 sun にしすがも創造舎

『B.E.D. (Episode 5)』
構成・演出・振付:リー・レンシン
11.12 sat - 11.13 sun 江東区某所

『POLITIKO』
講師・コンセプト:ムン・カオ
11.8 tue - 11.12 sat 森下スタジオ

も思えます。しかし、その混沌とした状況こそが現在のマレーシアであり、マレーシアの舞台芸術であるとも言えるはずです。四つの作品・レクチャーが示す多様性をお楽しみいただきたいと思います。